特定非営利活動法人
アフリカ支援

アサンテ　ナゴヤ

2024 年 12 月発行

目次

・ご挨拶　アサンテナゴヤ理事長　石川　佳子

・ケニア・ゲム村の診療所訪問　アサンテナゴヤ副理事長　内海　眞

・ケニア視察旅行　日比野　福代

・「奮闘を続けるエリアスさん！宮田さん！」　岩崎　奈美

・5 年ぶりにケニアを訪問して　愛知医科大学医学部地域総合　宮田　靖志

・ケニア訪問での学び　中部労災病院研修医 2 年目　宮田　茉由子

・ケニアでの研修を振り返って　愛知医科大学医学部 5 年　杉山　英里

・ケニア実習　愛知医科大学医学部 5 年　澤村　まりな

・ケニアでの実習を振り返って　愛知医科大学医学部 4 年　竹内　詩織

・ケニア渡航に参加して　薬剤師　垣越　咲穂

・ケニアに学ぶ　薬剤師　渋谷　伸子

・初めて参加して　芝　美樹

・6 年ぶりのケニア渡航 ～セント・テレサ・アサンテナゴヤヘルスセンターの発展とともに～
大阪市立総合医療センター感染症内科　白野　倫徳

・「これからこそつながりたい」　愛知県衛生研究所　水谷　裕子

ご　挨　拶

アサンテナゴヤ理事長　石川　佳子

いつも当NPO法人の活動にご理解とご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

私たちアサンテナゴヤの成り立ちは2008年に遡ります。ナイロビのスラム街で既に無料医療活動に参加していた内海副理事長を応援するために、数名で新たに団体を立ち上げたのです。その後、薬剤師の讃岐珠緒さんのご縁でケニアの奥地ゲム村での活動を開始するにあたって、2009年にリサーチの旅に出かけました。讃岐さんは残念ながら、2019年に交通事故で亡くなられました。

2009年　出逢い

翌年の2010年には日本から持ち込んだ二張りのテントから無料医療キャンプを始め、2011年には現地で大型テントを購入して文字通りキャンプを続けました。リサーチの旅でエリアスさんはじめ現地の人々との話し合いをした時に、皆さんの要望を聞いたところ、彼らからは「病院」と「クリーンな水」という要望が出されました。その2点が私たちの活動の目標になりました。

2011年　テント内の診療

その間、多くの医療関係の方々や私たちの活動に賛同してくださっている方々がキャンプに参加してくださり、無料医療活動は2010年から2019年まで続きました。2014年には支援してくださる方々のご寄付により診療所が完成し、翌年には200mの深井戸が掘削され、リサーチの旅での約束は果たされたのです。今後はどのように自立をしていくのか見守りたいと思います。

私たちの活動を支援してくださるのは個人の方々だけでなく、いくつかの団体の支援もいただいてきました。一宮中ライオンズクラブからは、2010年にアサンテ号（ハイエースの中古車）、2020年には救急車を寄贈していただきました。ソロプチミスト名古屋―中の皆様方からは毎年チャリティパーティの収益から多額のご寄付をいただきました。

2014年　診療所完成

私たちがこれまで活動を継続してこられたのは、2000万円を超える遺贈をいただいたことがとても大きいです。遺贈された方はアフリカで医療と子どもへの支援をしている団体への寄付を希望されていたということです。ご縁に感謝いたしま

す。

このように多くの方々に支えられて活動を続けて参りましたが、諸般の事情により、今後は活動を一区切りするため、来年の5月の総会での解散承認に向けて準備をして参ります。

今回のケニア渡航では、私たちがケニアでの活動でお世話になった方々へのご挨拶を兼ねた渡航でもありました。重度障がいの子ども達のための施設「シロアムの園」を運営されていらっしゃる公文和子先生、ナイロビのスラム地区で地域の病気の子供たちの支援をしていらっしゃるチャイルドドクター・ジャパンの宮田久也さんにお会いすることができ、参加の皆さんはとても感銘を受けていました。特に愛知医大の学生さんたちは多くのことを学んだようです。

アサンテナゴヤの立ち上げから今日まで関わってきた私たちは身を引かせていただきますが、無料医療活動に参加してくださった若い先生方は今後も何らかの支援をできないかと考えていらっしゃるようです。私たちは次の世代に託すことにいたします。15年間ありがとうございました。

2014年　診療所内での診療の様子

2015年　井戸掘削の光景

これまでに活動に関わってくださった方々はいろいろな想いを感じていらっしゃることと思います。そこで、来年5月の総会は想い出を語る会にしようと考えています。時期が参りましたら、あらためてご案内を差し上げますので、多数の方々にご参加いただければ幸いです。

ケニア・ゲム村の診療所訪問

アサンテナゴヤ副理事長　内海　眞

2024年9月14日土曜日夜、成田空港からエチオピア航空の飛行機に乗り込み、アジスアベバ経由でケニアの首都ナイロビに向かった。5年振りのケニア訪問である。主たる目的は、ゲム村のNGOであるRUNELD(Rural New Life Development)と我々アサンテナゴヤとの共同で設立した「St. Teresa Asante Nagoya Health Centre」（以下ゲム村の診療所）を視察し、その課題を調査することである。

5年振りのナイロビは大きく変化しており、特に高速道路の整備は目を見張るものがあった。交通渋滞は緩和され、道路を走る車も以前よりも新しいものが増え、ビルディングも郊外に数多く建設され

て、ナイロビは物質的には確実に豊かになっていた。中型バスをチャーターし、16 日月曜日に 1 日かけてケニア西部にあるキシイという都市のホテルに向かった。そのホテルは、以前から利用していた比較的廉価なホテルである。一日遅れで大阪公立大学の城戸先生と感染症研究所の菊地先生が、ナイロビから国内線の飛行機とタクシーを飛ばして深夜に我々と合流した。

翌日、ゲム村に向かった。ゲム村まではこれまでホテルから 1 時間以上かかったが、今回は 40 分もかからなかった。道路のほとんどが舗装されていたからである。ここでもケニアのインフラ整備が着実に進んでいることを知らされた。

訪問したゲム村の診療所は丁度無料医療キャンプを実施しており、多くの患者さんが集まっていた。無料医療キャンプ期間中は、一日 250 人から 300 人が診療所を訪れていて、以前我々が実施した無料医療キャンプの時と変わらぬ患者数であった。普段は 1 日 20～30 人の外来患者さんが来訪し、入院患者さんの数も 10 人前後だそうである。医療者は一人の医師を含む看護師、薬剤師、検査技師合わせて 15 人で、当初の 3 倍に膨らんでいた。診療所の近所には美容院やバーがあり、この診療所に日常的に人々が集まることを示していた。一時期外来患者数が 5 人前後であったことを思い起こすと、この診療所は着実にこの地に根を下ろしていると考えられる。診療所の近くには医師住宅があり、医師は夜間休日いつでも診療所に行ける態勢が作られていた。日本の昔の医師の多くはそのような態勢下にあり、懐かしく思い出した次第である。若い薬剤師の一人はとてもスマートで、医学的な知識も豊富であり、この診療所を支えていることを強く感じさせてくれた。彼女は菊地先生のことをよく覚えており、薬剤師を自分の職業として選択したことも菊地先生の影響があったのかもしれない。これまでなかった眼科の診療も無料医療キャンプでは実施されており、住民の医療ニーズに応えようとするスタッフたちの姿勢を見て取ることができた。分娩も実施されており、我々が訪問した時には二人の分娩直後のお母さんが赤ちゃんとともに入院していた。薬局には抗 HIV 薬が置かれており、この診療所においても HIV 陽性者に対する診療が行われていることを物語っていた。

診療所に 50 床の病棟を建設中だったが、現在のところ 2 階までのビルディングの外枠が建てられているだけで、工事は途中で中断されていた。ゲム村の診療所が着実にその利用者を増やしているのは明らかであり、段階的に病床を増やし、将来的に 50 床を目指すのはそれなりの根拠があると考えられる。問題はそれを完成させるための資金である。資金は不足しているようで、RUNELD のリーダーであるエリアス氏は、何とか銀行から借金をして完成させたい、

と話していた。我々のアサンテナゴヤは来年の6月ごろにその活動を終える予定でいる。資金が枯渇してきたことと、理事の多くが高齢化したことがその要因である。しかし、現地住民の医療ニーズに何とか応えようと努力するこの診療所への支援の中止は、実際に現場に来てスタッフの仕事ぶりを見ると断腸の思いに駆られる。我々も2009年から15年にわたってこの地の人々に関わってきた。今後どうすべきか？これが最大の課題である。一旦アサンテナゴヤを解散した後、次の支援方法をゆっくり考えていきたい。若い方々の知恵と力をお借りしたい。

ゲム村の診療所訪問に加え、今回は①シロアムの園、②キシイの病院、③カボンドの保育施設、④ナイロビのスラム、の4か所を訪問した。

① シロアムの園は、小児科医の公文和子先生がナイロビ郊外に設立した、重症心身障碍の子供たちとその両親をサポートする施設である。ケニアでは障碍を持つ親は呪われていると考えられ、両親は二重の苦しみを背負わなければならない。また、障碍を持つ子供たちに対する社会的支援も皆無で、公文先生は果敢にこの問題に挑戦してきた。もうケニアには20年以上住まわれ、ご自身の生涯を障碍児とその両親のために捧げている。

② キシイの病院の正式な名称は、Kisii Teaching & Referral Hospital で、650床のベッド数を有するハイレベルの病院である。夕方訪問をしたのにも関わらず、多くの患者さんが外来診療部門におられ、基幹病院としての機能を担っていた。日本のODAによって整備された病院であるため、我々は歓迎された。多くのHIV陽性者をフォローしている病院でもある。ゲム村の診療所では治療困難な重傷者はこちらの病院に送られる。

③ ゲム村から車で約1時間強の距離に、カボンドという地があり、そこにはHIV陽性の子どもたちを保育する施設があった。青年海外協力隊の隊員であった看護師の鈴木佳奈さんが単独でこの施設の支援に当たっていた。彼女が我々の無料医療キャンプの応援をしてくださったこともあって、アサンテナゴヤもこの施設を支援していたが、残念なことに今は施設が休業状態であり、ケニア人の支援者もいなくなったので寂れた状態になっていた。我々は子どもたちのために、学用品とボールなどのスポーツ用品を寄贈した。

④ 9月21日の帰国の日に、ナイロビにあるスラムを訪問した。以前スラムの近くでチャイルド・ドクター・ジャパンを主宰していた宮田久也さんが、現在日本人では彼単独でこのスラムの支援している。今年火事が発生し多くの家が失われた所である。宮田さんはスラムの仲間とともに我々を歓迎してくださった。スラムの子どもたちの挨拶の中に、「私は医師になりたい、両親と兄弟のために。」「私は弁護士になる、両親と兄弟のために。」という言葉を聞いたときに、自然に他者のために生きようとするスラムの子どもたちに大きな感動を覚えた。他者のためという点で、宮田さんとスラムの人々は共通の思いを抱き、生きている。自分を省みる瞬間であった。

9月22日日曜日の夜、無事に成田に到着した。8日間の短い旅行であり、過密なスケジュールではあったが、得るものは多かった。やはりゲムの診療所は何ら

かの形で支援していきたいという思いを確認できたことと、宮田さんの生き方に少しでも近づかねばという反省が、私には大きな収穫であった。

私は脊柱管狭窄症と腰椎椎間板ヘルニアを持っており、腰痛、臀部痛、両下肢の痛みに悩まされており、毎日鎮痛剤を飲んでいた。ケニアでも鎮痛剤は欠かさず、またハードなコルセットも毎日着用していた。日本に帰国してから２日ほど経ってから、実に不思議なことであるのだが、痛みが半減し鎮痛剤を飲まなくても日常生活ができるようになった。もちろんコルセットは不要で、それがこの原稿を書くまでの約１ヶ月間継続している。整形外科の医師に相談したが、首を傾げていた。ケニアの人々の思いやその風土が私に合っていたのかもしれない、と勝手に考えている。

ケニア視察旅行

日比野　福代

コロナ禍で５年間参加できなかったので、久しぶりのケニア旅行に胸がわくわく高ぶった。今回最後のケニア行きとなり、この５年間で聖テレサ・アサンテナゴヤ診療所とゲム村の発展やケニアの町がどう変わっているのかを見るのが楽しみだった。

ケニアへの道のりも今回エチオピア(アディスアベバ)で乗り次いでケニア(ナイロビ)まで、遠いようで案外と近く感じた。ナイロビの建物も大きくなり発展した都会となっていた。ナイロビのスポット場所はバスから見るだけで網の塀ができており、いつもの集合写真は撮れず、車窓からの見物となった。ナイロビのホテルは今までにない高級なホテルで何だか申し訳ないような思いがした。サファリパークの観光客が連泊するホテルだろうと感じた。

キシーに向かう前に、公文先生の経営するシロアムの園を訪問した。ケニアは障害を抱えた子供はほとんど家で過ごすことが多く預かってくれるところもない。

公文先生の働きでこのシロアムの園を設立された。以前より建物も大きくなり、多くの障害を抱えている子供たちのリハビリ、治療とその家族にも援助されている姿に感動した。今後の経営についても話されたが日本人として中々できることではない。今後も少しでも援助できることがあれば手助けしたいと思う。

ナイロビからキシーまでのマイクロバスの移動は中々遠く、いつもより遠く感じ１日かかった。翌日はキシーからゲム村へ、１時間半位の道のりが４０分程度で行けるようになった。村の近くまで道路が整備されており大きく変化していることに驚いた。村の生活も少しずつ変化しているのだろうと感じた。以前は電気もなく、水も汚いため池から水を汲んで生活されていたのが、今は井戸を掘り、きれいな水もあり生活が豊かになったと感じた。訪問時は無料医療の当日で多くの患者が来院されて賑やかな診療風景だった。

建物も増えており経営されているエリアスさんの説明を受けながら、お金もかなりかかっていることを話されていた。今後自立した経営が上手くいくことを願うだけだった。

その後、キシーの病院を訪れて検査科を見学させていただき、地域の検査も担っていることをお聞きした。機械化されていることが日本より少なく、手作業が多いことから狭い部屋に多くの人が作業されていた。翌日はエリアスさん自宅にてみんなでカレーを作り提供したり、ゲム村の方々の料理をいただいたりして、最後の食事をとり交流を深めた。

その後、HIV の感染の多いカボンドの村を訪問したが、中で分裂があり、以前と違うイメージが伺えた。以前は貧しい村で少しでも日本からの援助物資の子供の靴や服を多く渡していた。今回もできるだけ多くと渡したが、子供も大きくなり援助はしたが、今後はどうなっていくのか不安である。

キシーからマイクロバスに乗りナイロビへの移動は、行きよりも近く感じた。翌日はアンボセリ国立公園へ。当日はランドクルーザーに分散してサファリパークへと向かう。以前とは違うサファリパークで、象の大群やキリンを見て雄大さに圧倒された。

帰りのナイロビにて、チャイルドドクターを訪問した。スラム街で活動している宮田さんの援助内容をお聞きしながらスラムの中を散策して、この中で生活されているのかと思うと、集合のトイレ、水の配給、勉強等はどのようにされているのか、厳しい現状を目の当たりにして、ケニアの貧富の差を見た思いがした。以前よりケニアの物価も高くなり給料面は変化しているか不明だが、今後のケニアの発展を注視していきたい。

今回ゲム村の視察で参加しましたが、今後もゲム村が大きく変化して成長されていくことを願っている。５年ぶり楽しく参加させていただきありがとうございました。

「奮闘を続けるエリアスさん！宮田さん！」

岩崎　奈美

2009 年、初めてゲム村を訪れた時に強く印象に残った肥沃な土地、空気の心地よさ、子供の少し恥ずかしそうなしぐさ、はにかむような笑顔。それらは 6 年ぶりに訪れた今回も同じように見えました。が、それらを取り巻く状況には確実に変化が！！診療所が建つ辻には、美容院とお肉屋さんが開業し、一目で「人が集まる場所」になったことが分かりました。

ゲム村は数年後、どんな変化を遂げるのでしょうか？

一方で思いがけず、最終日の帰国直前にチャイルドドクター代表、宮田さんと現地スタッフ、スラムの子供たち、その親御さんと交流する時間に恵まれました。粗末な家と家の間の通路はすれ違うのがやっと、通路の真ん中は極浅い溝、溝には汚水。スタッフの手を借りながら 10 分ほど進んだ先に空が開けた交流広場がありました。限られた短い交流時間でしたが、終始笑顔の宮田さんに見守られながら、代表の子供たちが自分の夢を発表し、皆で写真を撮ることができました。少年少女の夢がどうか叶いますように！と願うばかりです。

状況は以前より悪くなっているかもしれないスラムで活動を続ける宮田さん、ゲム村で奮闘を続けるエリアスさんの姿は自分自身の活力になりました。また、会いたい！

ゲム村、チャイルドドクターに心ばかりの支援を送りたい。そう、思う方は多いと思います。必ず届く支援のしくみが続くことを祈念します。

最後になりましたが、渡航の一員に加えてくださり、ありがとうございました。

5 年ぶりにケニアを訪問して

愛知医科大学医学部地域総合　　宮田　靖志

１．はじめに

2018 年に本学の地域枠学生 2 名を連れて初めてケニアでの活動に同行させてもらいました。その際には、何から何まで初めて見るもの体験するものばかりで、感動の連続だったのを今でも覚えています。2019 年にも同様に地域枠学生 2 名を連れて同行させていただきましたが、その後は世界的なコロナ禍のため渡航が中止となり、今回は 5 年ぶりに再開されたケニア訪問でした。残念なことに今回が最後のケニア訪問になるかもしれないと聞き、無理をお願いして今回は学生 3 名を同行させていただくことになりました。この場を借りてアサンテナゴヤの皆様に御礼申し上げます。

２．優しい笑顔の中にある公文先生の圧倒的な力強さ

7 年前に初めて公文先生のシロアムの園を訪問した際には、こう言っては大変失礼ですが、お世辞にも立派な建物とは言えない場所で障がい児のケアをされていました。しかしながら、ケニアで施設建

築から運営までを一人でされてシロアムの園を立ち上げられ、一人一人の児童を丁寧にケアされていること、その姿に驚きとともに感動を覚えたことがついこの間のように思い出されます。翌年には日本に帰国されると聞いたので思わずぜひ名古屋で地域枠学生に、そしてまた私が主な活動の場としている医学教育学会のシンポジウムで医学教育者に公文先生のお話を聞かせていただけないかとお願いし、それをご快諾くださり実現させていただいたことは望外の喜びでした。

さて、今回は渡航１日目のごく短時間の訪問でしたが、その後の公文先生のご活動の様子を非常に楽しみにしていました。ちょうど日本を発つ日の土曜日に妻から連絡があり、翌週のＴＢＳ番組“情熱大陸”に公文先生のドキュメンタリーが放送されることが分かったのは、勝手に何か運命のようなものを感じたのは、私だけだったでしょうか？思わず渡航メンバー全員にその放送のことを伝えたのでした。

シロアムの園へ向かう道は施設に近づくにつれ道路は以前と同様あまり整備されておらず昔の印象がよみがえってきたのですが、施設の門をくぐった瞬間に目を見張るような光景が広がっていました。以前の施設はどこに行ってしまったのか、施設は大規模な立派な施設に様変わりしていました。変わらないのは私達皆を迎える公文先生の優しい笑顔だけでした。一人一人と挨拶を交わされる中、少ししか接点のなかった私を覚えていてくださっていて名前を読んでいただいたときには、何か胸が熱くなるような感覚を覚えました。こうして一人一人との出会いを大事されている本当に心根の優しい方なのだと改めて感じたのでした。

壁画の前にて

施設の庭の塀に飾られている通所児が作成した Siloam Mural Project の壁画は圧巻でした。障がいがあっても心豊かに育っている子供たちの生き生きとした姿が思い浮かんでくるこの壁画は、公文先生の障がい児ケアの夢と希望を表しているように思われました。

実際の施設はたくさんの建物で成り立っており、この５年の間に大きな変貌と遂げていました。私はその施設の立派さには当然感動してはいたのですが、それよりもなによりも、このような施設の拡充をたった５年の間、しかもコロナ禍を挟んだこの５年間に成し遂げられた公文先生の力強さに感動せざるを得ませんでした。様々な部門との折衝、資金調達などなど大変な苦労がおありになったと容易に想像されました。“この施設を建築するのにどのくらいの資金が必要だったのですか”とお金の問題をためらう余裕もなく私は質問してしまうほどでした。

“私はこの施設を大きくして他の施設も作る、ということは考えていない。この施設の今後の継続性が維持されるようにすることが最も大事であり、だれかがこの施設の運営をまねしてもらって他の施設を展開してもらえたらよいと思っている”というような趣旨のこと述べられていたのが印象に残っています。一人の偉大な人が何かを創り上げ、その人がいなくなったら衰退するようでは意味がありませ

ん。サステナビリティはどのようなプロジェクトでも最も重要な課題と思います。私事ですが、私の講座や各地の総合診療教育部門の在り方について考えていたことを鋭く思い起こさせられるものでした。

３．ビッグピクチャーを常に考えて理想を追い求めるエリアスさん

ゲム村の診療所の状況視察は今回の訪問の最大の目的でした。しかりながら、今回は診療を行わずあくまでも視察に留めると出発前に聞いていましたので、正直なところ少し物足りなさを感じていました。そんな気持ちを抱きつつ診療所に向かうバスに乗り、5 年前にはスコールの後のぬかるんだ道でタイヤがスタックして皆バスから降りてバスを押したことがあったなあ、と懐かしい場面を思い出しながら同じ道を施設に向かって進みました。

建設中の入院施設

アサンテナゴヤメディカルセンターの以前と変わらぬレンガの門が見えたのもつかの間、門をくぐるとここにも圧巻の光景が広がっていました。物足りなさを感じていた私のこころは一変しました。5 年前に訪れた時には、メディカルセンターの施設はほぼ整備され様々な診療、検査ができるようになっていたのですが、その施設の背後にさらに新たな施設が建築中だったのです。まだ 1 階部分が建っているだけで、しかもまだ壁もむき出しの状態でしたが、これは入院施設であることがわかりました。エリアスさんによるとこれを 2 階、3 階建てにするそうなのです。建設中のこの施設の 1 階部分の屋根の上に案内された私たちは、将来のこの入院施設の展望を語るエリアスさんの熱いお話しに聞き入ったのでした。

建設中の入院施設の屋根の上で

しかし、そのことの実現には大きな障壁があります。建設資金です。非常に貧しい地域であるこの村でどうやってその資金を獲得するか。夢を実現するためには理想を語るだけでは叶いません。どうやって現実の問題を解決していくか、当然のことながらそれが重要です。しかしおそらくエリアスさんは必ずやそれを成し遂げられるだろうと私は確信にも似た感覚を持ちました。公文先生同様、やさしい笑顔の中に秘めた強い意思をエリアスさんに感じるからです。実際、こうして入院施設の 1 階部分の建築が進んできています。ぜひこの入院施設の完成を現地で見たいと強く思いました。

メディカルセンターでの診療は 3 人のクリニカルオフィサーによって行われており、大勢の患者さんが集まってきているのを目にして、ケニアのへき地の医療施設で住民に適切な医療提供が行われていることを認識しました。同行させてもらった本学の地域枠学生 2 名、海外での医療支援に強い関心のある一般枠

学生１名は、この施設、この診療を実際に見て、医療に恵まれない人々をどうケアするかについて、何がしか心を打たれるものがあったと信じて疑いません。

海外での医療支援に関心のある本学の学生をエリアスさんに紹介したところ、エリアスさんはその学生をえらく気に入ってくださり、ユーモアを交えながらしばらく話をしてくれました。“ぜひここで将来医療を行ってほしい。医師として赴任してくれたら、ほら、あそこに見える医師住宅に住まわせるから（笑）”将来彼女が何らかの形でこの地で活動してくれることが頭に浮かんでくるひとときがあったのはご愛敬。

４．カボンドでHIV陽性の子供たちが通う学校の崩壊に思うこと

７年前に初めてこの学校を訪問した際、歌を歌いながら踊りを披露して私たちを歓迎してくれたのでした。学びの様子を視察したときには、子供たちは土壁でできた小さな小屋の中で地べたに座って授業を受けていました。子供たちはHIV陽性ということで偏見，スティグマを背負わされてこの山奥の非常に劣悪な環境の中で学ばざるを得ないこと、そしてその子供たちが有志の先生たちが支えていることを聞きました。訪問が終わって私たちを見送る際に再び披露してくれた踊りと歌に、私は思わず涙をこぼしたのでした。

カボンドの子供たちとの交流

再度訪問できることを心待ちにしていたのですが、残念なことに現地に到着してみると学校の運営はされていないことが判明したのでした。先生たちの内紛によって学校運営が崩壊したようでした。非情な現実を見せつけられ心を打ち砕かれるような感覚でした。理想的な活動、善意による活動、それは必ずしもうまく継続されるとは限らないという当たり前の事実を突きつけられました。児童たちは今どうやって学んでいるのだろうか。今後どうなっていくのだろうか。医療にもどうにもならない現実が待っていることがあります。医療の限界を突き付けられることがあります。それによって医師は時にバーンアウトしてしまうことがあります。一方で、そのような現実を直視しながらも前進していく医療者もいます。レジリエンスを備えて前に進んでいっているのだろうと思います。学校の崩壊に直面して、そのようなことを考えながら、現地の方たちがふるまってくれた軽食を口にしていたのでした。

５．スラムドクター（医師）、スラムローヤー（弁護士）を目指す子供たちを支えるチャイルドクターの活動からもらった希望

最終日にチャイルドドクターの施設を訪問することになっていた場所は、前回ごく短時間だけお邪魔した事務所を想像していました。しかし、到着したところはスラム街の一角でした。理事長の宮田さんによって通されたのは、いわゆる掘っ建て小屋のような建物で子供たちの食堂として使用されているところでした。私達同行者15人が入ると立錐の余地もない狭い場所でした。ここで宮田さんから話を

お聞きすると、スラム街では最近2回の火災が発生してしまい、スラムの子供たちを支援するために今はここで活動しているのだそうです。

このスラムの状況説明を聞いたのちに案内されたスラムの中は悪臭が漂い、非常に衛生状態の悪い中で住居となっている小屋がひしめき合っていました。トイレがしっかりとは整備されておらず、通路を流れる下水に排泄物を流すこともあるようでしたが、ところどころに設置されているトイレもさほど環境に配慮されたきれいなものではありませんでした。トイレの利用は手持ちのお金があって支払いできる人は使用のたびに少額の利用料を払うのですが、手持ちがない人は無料で利用するようです。数か所のトイレにはアサンテナゴヤの支援金で購入されたプラスチックの水がめが設置され、手洗い衛生を進めていました。

スラム街の奥の広場に到着すると、そこにはスラムの子供たちが集まっており、私たちを歌って歓迎してくれました。2，30名の子供たちがいたでしょうか、皆生き生きとした表情であったのは意外でした。ここではこの子供たちなりに日々しっかりと生きていることが、その表情から伝わってきました。おそらくこれはチャイルドドクターの皆さんたちが心から子供たちを愛してケアし、明日への希望を持たせているからなのだろうと思いました。

というのも、一部の子供たちが一人一人名前を呼ばれ、自分達がどのような人間で将来どうしていきたいかを私たちを前に挨拶をしてくれたその言葉から感じたのでした。それはこのスラムで学び、将来は医師になる、弁護士なるというものでした。スラムドクター、スラムローヤーになる、という彼ら彼女らの力強い言葉に心を打たれざるを得ませんでした。

日本のみならず、おそらく先進国と言われる国では、医師や弁護士になるにはそれ相応の裕福な家庭環境がなければその夢は叶いません。偏見とは思いつつも、私はそのような環境から医学の道に入ってくるようでは、ヒューマニズムがあり利他的な考えをもつ医師になっていくのは困難であり、よほど様々な経験をして自身の価値観を大きく変容させなければならないだろうと思っています。このような学びは変容学習と呼ばれます。

今回スラム街で将来の医師、弁護士を目指して勉強している子供たちとそれを支えているチャイルドドクターの皆さんの姿を目のあたりにして、世界を大きく変えることはできなくとも目の前の小さなところから人々を少しでも幸せにしていってくれるように子供たちが成長していくに違いないことにささやかな希望を見出していました。私の日々の教育活動に改めて大きなモチベーションを持たせてくれる訪問でした。また、引率した医学生たちにとっては変容学習の機会となっていることは間違いないと思います。

６．おわりに

今回で3度目のケニア訪問でした。毎回、大きな感動と希望を与えてくれる様々な貴重な体験をさせていただいています。引率した3名の医学生は私以上に貴重な体験と感じてくれていると思います。

わが身のことではなく、人に尽くす人々の活動に接し、毎回自分の日々の活動を反省させられ、明日への活力を与えられます。私が在学した大学の尊敬する学長の言葉は学生時代から卒業した今まで忘れることはありません。“忘己利他”　このことをしみじみとかみしめるケニア訪問です。この経験を学生ともども自分たちの身近な地域社会に何らかの形で還元したい、還元すべきと強く誓う体験でした。

ケニア訪問での学び

中部労災病院研修医２年目　宮田　茉由子

初めに

大学 2 年生の時にアサンテナゴヤで定期的にケニアを訪問していることを知り、研修医 2 年目となった今年、訪問に同行させていただくこととなりました。

このような貴重な機会をいただき、理事長の石川佳子先生、副理事長の内海眞先生をはじめ、アサンテナゴヤの関係者の方々に感謝いたします。

1, シロアムの園

シロアムの園の代表、公文和子先生は北海道の病院で小児科医として勤務したのち、アフリカに拠点を移し、2002 年からケニアで活動している。2015 年にシロアムの園を設立し、今年で 9 年目となる。

シロアムの園は発達障害から重症身体障害者が通う通所施設であり、居宅施設にしないのは通うことで社会性を身につける意味もあるとのことだ。理学療法、作業療法、栄養指導、家族支援などを行なっている。施設の中にはリハビリができる機械が部屋ごとにあり、シャワーを浴びる練習ができる場所、生徒たちが過ごす教室、家族同士が話し、悩みなどを共有できる家族のための部屋、家族が収入を増やすためのドーナツなどを作るキッチン、雨の日でも運動ができる体育館、親が野菜などを育て売るための畑などがあった。施設はとても広く、リハビリの施設も整っていた。

シロアムの園に通うある男の子の家族の話を聞いた。その子の母親は障害者である自分の子供を認知できず、蒸発し、祖母が面倒を見ている。しかし、祖母が仕事を探すと障害がうつると言われ、就職先が見つけられない。アフリカには依然としてこうした障害者や HIV 患者に対する差別、偏見が根強く残っている。そもそもケニアでは障害児支援をしても国益にならないため、障害者支援が少ないそうだ。支援学級も一応あるが、数が少なく、先生も少ない。発達障害の子などがシロアムを卒業

し、一般の支援学級に行ってもすぐに帰ってきてしまうことが多い。シロアムの子供たちは 18 歳になっても就労できず、そのまま通い続けており、今後、卒業後の子供たちの支援をどうしていくかを考えているそうだ。さらに、公文先生が中心となって行っている現在の支援を現地の人たちでやっていけるように少しずつ教育をおこなっている。

見学を通してシロアムの園では通っている子供たちだけでなく、その子の家族全員を見守っており、助けを必要とした時には公文先生もその家族の一員かのように寄り添い解決策を考え、支えているように感じた。

公文先生は「違いがあることが不公平さではなく美しさを生む社会にしたい」とおっしゃっていた。そういった偏見はなかなか拭えるものではなく、実際に障害者とふれあい知ってもらうことが大切であり、さらに正しい知識を学ぶことで拭えるものだと思う。

これは日本でも言えることで、日本では重症身体障害者の施設や在宅診療、就労支援などはあるが、以前として障害をもって生まれた子供を認知できない親も多く、育児放棄や、重症身体障害者施設に入所させ、面会に来ない親もいる。公文先生の言っていたことの実現はなかなか難しいことように思えるが、多様性が認められ始めた現代では可能性はあるのかもしれないと思うと同時にそういった障害を持った子供とよく触れ合っている我々医師が偏見を拭えるよう機会を設けていくべきだなと感じた。また公文先生の生き方を知り、自分が医師として働く上で、患者への接し方に関し、公文先生の子供たち、家族への向き合い方を忘れずに接していこうと思った。

2, ゲム村

ゲム村についてまず感じたことは自分が想像していたよりも施設が充実しているということである。診察室、女性病床、男性病床、検査室、薬剤部などがあり、トイレも水洗であった。以前使われていたトイレも見させてもらったが、ただの穴が空いているだけであり、これがトイレなのかという印象であった。薬剤部も処方された薬は封筒に入れて仕分けされており、これは以前、訪問した際に教えたことで、それがしっかり生かされていた。そう考えると他の国からの支援もあるとのことだが、アサンテナゴヤが継続的に支援してきた結果、診療所がここまで大きくなり、村の人たちからの需要もあるのだと体感した。

また、スケジュールにはなかったが菊地先生がエリアスさんに話をしてくださり、医療キャンプの診察に同席させていただけることになった。実際のケニアでの医療を間近で見ることができ良い経験となった。診察時は普通にしており、倦怠感などの症状すらなさそうな少女がマラリアであったり、咳もなく、呼吸状態も安定している子が肺炎であったりと、普段、日本の病院で診ている患者とは訴えも症状も違う。私が診察に同席させていただいたのは普段は大きい病院に勤め

ている内科医で医療キャンプのため一時的にゲム村の診療所に来ている女性医師であった。内科医であるが、小児科ブースで診察していた。まずそのことにも驚いた。自分は普段小児を診察することがないため、どこからが治療対象で、どこからが検査が必要なのかもわからず不安を覚えるが、その女性医師は患者の訴えを聞くとすぐに診断しており、検査、内服をカルテ？(紙切れ)に記載していた。また３歳くらいの腹部膨満の患者もおり、3 歳以下の患者は自分であれば血液検査、Ｘｐは撮ってデータを確認したいと思うところだが、資源も設備も限られているためそうもいかない。自分が普段いかに検査に頼っているかを実感し、身体診察を学びなおそうと改めて思った。

ゲム村の帰りにはキシーで一番大きい病院を見学させていただいた。Level５であり、日本の大学病院クラスだと聞いた。そこではNICU、精神科、HIV 病棟を見学させていただいた。NICU では２つの部屋があり、NICU と GCU のような分け方かなと思うが、部屋には照明がなく、外からの光だけであった。どちらも８畳程度の広さであり、そこに多くの新生児がいた。床にはお母さんたちが座り込み授乳しており、1 つの保育器には 3 人くらい入っている。どの子が誰なのか判別がつくのだろうか、と疑問に感じた。また、日本では看護師が授乳のコツや排便の仕方などを詳細に指導しているが、そのような様子はない。しかし、呼吸器や光線療法などの設備はある程度充実しており、新生児の死亡率も大幅に改善してきているとのことだった。また、精神科では４つの州の精神患者をここだけで診ており、ベッド数も精神科医も足りていない。ベッドが足りないときは１つのベッドで２人寝たり、床で寝たりすることもあるそうだ。精神科病棟は大きい部屋と小さな診察室、庭で構成されており、女性、男性は扉のない２部屋で区切られているだけだ。閉鎖病棟などなく、窓ガラスは割れていた。病院見学を通し、どのくらいの稼ぎがあればこの病院を受診できるのだろうかと思った。日本の大学病院と比較するとレベルは落ちるが受診科も入院床も多く、救急外来もある病院であるが、日本では国民皆保険があり、生活保護の人は無料で医療が受けられるのに対し、ケニアではそのような制度はなく、当たり前にお金が払えなければ医療は受けられない。ケニアでの貧富の差を感じるとともに日本の病院の医療資源の潤沢さと国民皆保険によって貧困者でも医療が受けられる環境のよさを感じた。

3, カボンド

カボンドはHIV 陽性の母親たちが集まって作った村でそこで学校を支援している方がいるとのことで古着などの物資を持ってバスで向かうと、学校がなくなっているとのことであった。一旦村に向かいエリアスさんが村の人に話を聞くと大人同士が揉めてしまい学校の先生が辞めてしまったらしい。以前には医者になるため学費を支援した学生が学費を持ち逃げして行方が分からなくなったこともあったというエピソードを内海先生から聞き、子供たちの将来や、施設の発展などに希望や期待をもって支援している中、期待を裏切られながらも継続的に支援をする難しさを感じた。学校はなくなってしまったが、まだカボンドに残っている人達が今回の訪問のために集まって下さり、歓迎の歌や、食事をふるまって

くださった。HIV 陽性であるために偏見をもたれ、一般の学校に通えない子供が多くいる様子を直接見て、公文先生の言っていた偏見、差別が根強くあることを改めて感じた。

4, スラム

スラムに近づくだけで何とも言えないにおいが車の中まで匂った。道路を見ると黒い水が流れているのが見えた。そのスラムでは宮田さんがスラムの子供たちの支援をしており、子供食堂を開いていたり、スラムの衛生環境の整備をしたり、医療支援が必要な家族に支援をしたりしている。スラムの中を実際に歩いて案内をしていただいた。スラムの中にも先ほど見た黒い水が流れており、それについて聞くと、自宅にトイレはなく、公共のトイレはあるが大人は 10 円を払わないと使えないため、お金が払えない人は下水にそのまま流す。その影響で下水が黒くなり、感染症なども発生するのだそうだ。スラムには 1 日 100 円以下で生活している人も多くいるためトイレに 10 円は高いなと感じた。スラムには片親の家族も多く、トイレに 10 円が払えない生活環境では体調を崩しても病院受診などできるはずもなく、その後親を失い孤児になる子供もいると知り、医療支援の重要性、スラムでの衛生環境を整えることの大切さを感じた。

シロアムの園、ゲム村ともにすでにある程度環境が整っており、それと比較し、スラムは貧困の実際の現状を見ることができ、刺激を受け良い機会になった。このような環境下でスラムの子供たちが家族を支えたいという理由で医者や弁護士、教師を夢見る子供たちが多くいることに感銘を受けました。

最後に

今回の訪問で数多くの学び、気づきがあった。

ケニアでお会いしたケニアでの医療に貢献している方々の考え方や行動力を心に刻み、今後医師として働く上で自分に何ができるかを考えるとともに、自分の恵まれた環境に感謝し、恵まれない人々の支えになれるよう行動していきたいと思いました。

ケニアでの研修を振り返って

愛知医科大学医学部 5 年　杉山　英里

はじめに

いま日本に帰ってきて振り返ってみてもケニアで見た景色、すべての人との出会いや体験が今でも色濃く心に残っています。今回のケニアでの 10 日間はたくさんの発見と感動と学びがありました。そして一人の人間として自分はこんなにも知らないことがあるのかと痛感し、今後の課題が見つかる経験になりました。

以下、ケニアでの日々を振り返り体験記をまとめました。

9/15

日本から約 24 時間かけてナイロビに到着。来る前はアフリカ都市のイメージはなかったのですが、いざ着いてみると空港からナイロビの中心部までつながる高速道路があり、街には高いビルやマンション、きれいなショッピングセンターがあって今まで抱いていたアフリカのイメージがガラッと変わりました。

ホテルの窓からはナイロビ国立公園が見えて今アフリカにいるのだという実感がわいてきました。

9/16

シロアムの園訪問

公文先生が運営されている、障がいのある子供たちの療育を支援する施設「シロアムの園」を訪問させていただきました。ケニアでは多くの障がいのある子供が医療・教育を受けられずに十分な支援を受けられていません。その背景には障がいに対する差別や偏見があることや知識を持つ専門家がいないこと、経済面を支える社会保障・健康保険・福祉制度がないこと、インフラが未整備で環境が整っていないことなど多くの問題があることを学びました。そもそも障がいのある子供の支援は国益につながりづらいので支援が少ないという問題もあります。発展途上国では経済面での問題が大きな比重を占めているがゆえにどうしても社会的に支援が必要な人への福祉は見逃されているのだと思いました。

公文先生はシロアムの園でクラス活動や個別リハビリを通して療育環境を設け、家族支援や地域の人とのつながりを作って障がいがあっても住み慣れた環境の中で暮らしていけるような支援をしていました。施設の中ではいきいきと楽しそうにしている子供たちの姿がたくさんあって笑顔を見るだけでパワーがもらえました。

施設内で楽しそうに子供たちと話す公文先生の姿をみて、先生が愛をもってすべての子供たちを関わっていることがとても伝わってきました。私も先生のように愛をもって患者に寄り添うことのできる温かい医師になりたいと思いました。

Kisii まで車で移動

シロアムの園を離れた後はナイロビから 300 km程離れた Kisii という町に向かいました。ドライブ中は見たことのない景色の連続でした。広大なサバンナの中にオアシスがあったり、シマウマが道路のすぐ近くに何頭もいたり、草原の中で数えきれないほどの牛を引き連れて歩いている人がいたり窓の外を見ているだけでワクワクしました。

9/17

ゲム村診療所訪問

アサンテナゴヤが支援しているゲム村の診療所に向かいました。ホテルから診療所に近づくにつれて畑や林が多くなってきて、ガタガタな一本道を通った先に診療所がありました。診療所には赤ちゃんからお年寄りまで多くの人でにぎわっていました。診察室だけでなく、救急車、分娩室、男女別の病室、眼科診察室、薬局があり、ここだけで医療が完結できるように環境が整備されていました。薬局では薬が種類ごとに袋にまとめられていて、棚ごとに薬が整備されていてコンパクトにたくさんの薬がまとめられていました。日本ではあまり見ないドリンクタイプの薬が多かったのが印象的でした。

診療所の事務所を見学したときに“Top 10 conditions”と書かれた張り紙があって、そこにマラリア、肺炎、消化性潰瘍、尿路感染症、上気道感染症、扁桃炎、高血圧、糖尿病、喘息、有機リン中毒が挙げられていました。マラリアがケニアの人たちにとってそんなに良くあるありふれたものなのだということを初めて知りました。あとから城戸先生にゲム村のような地域に住む人たちは大体 1 年に 50 回くらいマラリアに感染しているということを教えてもらってとても衝撃的でした。成人は免疫があるので感染しても無症状ですが、小児は免疫がなく重症化しやすいので直ぐに治療する必要があります。ゲム村のような病院からアクセスの悪い地域においてこのようにすぐに診療が受けられる場所があることの需要の大きさを感じました。実際診療所を見学していた時にもマラリアの感染が確認された女の子がいました。女の子は見た目では特に体調が悪そうな感じはしませんでしたがヘモグロビンを計ってみると 5.8g/dl とすぐに輸血が必要なくらいひどい貧血でした。診療所がなかったらこの子はどうなっていたのだろうと考えると恐ろしいなと思いました。ゲム村

のような田舎ではきっと多くの人がこうしてマラリアで亡くなっていて、他の医療が届いていないところでは現在進行形でも命が失われている状況があるということを痛感しました。TOP10 の話に戻りますが、有機リン中毒が TOP10 にランクインするほど多いことに驚きました。確かにゲム村はほとんどがどこもかしこも茶畑やバナナ畑であふれていましたし、ゲム村のほとんどの人が農業で生計を立てている人たちなので農薬による被害も common disease になるのかと思いました。調べてみると発展途上国では農薬による有機リン中毒が多く、死亡する事例もあるという報告がありました。農薬被害の情報を提供して健康指導を勧めることもこれからの課題になっていくのではないかと思いました。

診療所では問診の様子を見学させていただきました。患者の主訴に合わせて問診・身体診察し、メモに情報を書き出して診断まで行い、必要があれば検査を振り分けてたくさんの患者を診ていました。先生について見学させていただいたのですが医学英語がわからず内容を部分的にしか理解することができなかったので英語力不足を痛感しました。これをきっかけにもっと英語の勉強をしようと思うようになりました。

Kisii Teaching＆Referral Hospital 訪問

ゲム村の診療所を離れた後は Kisii の町の中心部にある Kisii Teaching＆Referral Hospital を見学させていただきました。ケニアでは病院が規模ごとに６つのグレードに分かれています。Kisii Teaching＆Referral Hospital はグレード５で、2 番目に規模の大きい病院で病棟もいくつかあり、たくさんの患者さんがいました。

病院では NICU、精神科病棟、HIV 治療のための施設を見学しました。

NICU では一つのベッドに 3、4 人の新生児が寝ていたり、2 人そろって一つのベッドで光線療法がおこなわれていたりして小さな病棟に 66 人の新生児が入院していました。日本では当たり前に一人一つのベッドで常にモニターが付いていて厳重に管理されているイメージがあったので日本との医療のギャップを感じました。また、病棟内は面会しに来ている母親であふれかえっていてスムーズに歩くことができないくらいで、もはやだれが医療従事者で誰が母親なのか見分けがつかないほどでした。面会は 24 時間許可されているそうで、面会の制限がないというのも日本と違いがあるなと思いました。

精神科病棟はまず入ったら患者さんが興味津々の様子で話しかけてきて、鍵が病棟内についている感じでもなくて開放的な空間だったことが印象的でした。病棟内にはベッドがいくつかおいてあり、寝ている人もいましたが、庭でぶらぶらしている人がいたり、ずっと話しかけてくる人がいたりとさまざまでした。病床は特に誰のベッドと決まっているわけではないらしく、患者が多いときには二人でベッドを分け合うときもあると聞いてびっくりしました。

HIV の施設では 5000 人の患者を診ていて、結核リストに一つでもチェックがついたら HIV の検査をすること、HIV 感染のリスクが高い人には HIV 治療薬の予防投与を行うことなど治療や検査の流れを学びました。薬剤が置いてある部屋では実際に治療に使われている合剤の薬を見させてもらいました。今まで暗記していた薬の実物を見ることができて知識と臨床の場が少しつながった気がしました。なかなか

日本ではHIV専門の施設を見学することや実際の治療の話を聞く機会がなかったので興味深いお話ばかりでした。

9/18

ゲム村診療所訪問

ゲム村の診療所の運営をされている牧師のエリアスさんの家に行く前に30分ほど診療所を見学しました。ちょうど診療所には中学生くらいの制服を着た学生の集団がいて、学校の先生と思われる人に引率されていたので診療所は学校保健の役割も担っていることを知りました。この診療所は地域に密着した、この村にはなくてはならない存在になっていると感じました。

牧師のエリアスさんのご自宅にて昼食

診療所から15分ほど歩いてエリアスさんのご自宅に向かいました。診療所のすぐ近くには学校があり、休み時間中の学生の集団に遭遇しました。みんな話しかけると笑顔で寄ってきて話してくれて、純粋でかわいい姿に癒されました。

エリアスさんのご自宅ではエリアスさんの親戚一同もそろってみんなで昼食を食べました。日本の材料を使って作った野菜カレーとエリアスさんのご家族が作ってくれたケニア料理の数々をいただきました。エリアスさんを含めご家族の皆さんとてもフレンドリーに迎えていただき、ケニアの人々の心の温かさに触れました。昼食までの間、庭で女性たちが料理をしている様子を見ていて、ケニアの人々の暮らしを少し知ることができて面白かったです。

カボンド村にあるHIV陽性の子供たちの施設

エリアスさんのご自宅で昼食を終えた後はカボンド村にある、HIV陽性の子供たちの施設を訪れました。HIV陽性者の親から生まれた子供は若くして親をAIDSで失ったり、親が逃げて養育を放棄されたりして孤児となっているケースが多くあります。また、偏見・差別によって苦しみ、社会との関わりが希薄になって十分な教育や発達段階におけるサポートを受けることができていないという現状があります。カボンド村ではそのような環境に置かれたHIV陽性の子供たちが集まって養育を受けられる学校がありました。ただ、学校の先生の一人が資金を持ち逃げするという事件が起き、学校の人々は分裂してしまうという悲しい出来事があり、学校はなくなってしまいました。それでも今回訪問したときは20人くらいの子供たちと数人の先生が集まっていて、アサンテナゴヤからは洋服や靴、日用品を提供しました。カボンド村は遠くに湖が見える緑に囲まれた美しい村でした。乳児から高校生ぐらいの子供が声を合わせて歌を歌っている姿は村の景色と相まってとても心に残っています。今回のような悲しい出来

事があったことはとてもショッキングな出来事でしたが、その持ち逃げした人だけを責めることはできないのかなとも思いました。カボンド村はほかの都市からはずっと離れていてわざわざ誰かが物資を届けに行かないと支援を受けることのできないような貧しい村です。そこに自分が十分に生活していけるお金が手に入る状況があったら、、、と考えるとそのような環境にいる人しかわからない感情の葛藤があるのかなと思います。この出来事を通じて支援する側の難しさを学びました。ただ資金面を補助するだけでは対立が起きかねないので支援の形をよく考えて行動しなければならないし、本当に信頼できる人だと思っていてもお金で人が変わってしまうこともあるということを実感しました。支援者側としては信頼関係が崩れた時点で支援を続けることは難しいけれど、支援がその人たちにとって必要不可欠なものであるという現状は変わらないので放置することは難しいです。本当に支援することは想像以上に簡単なものではなく、責任をもって行動する勇気が必要だと思いました。

9/19

城戸先生による講義

今世界中で問題になっているエムポックスについての講義をしていただきました。天然痘の歴史から分かりやすく説明してもらいました。

国際医療の最前線で研究をされている先生のお話はとても刺激的で面白かったです。

最後に先生が「必ず何かするときは誰のどんなbenefitになるか考える。一点張りだとうまくいかない」と仰っていた言葉が印象に残っています。これから色々な選択がある中でこの言葉を胸に刻んで、決断する前に物事をよく見極めて行動していこうと思いました。

Kissi 出発

この日の朝にはKisiiを出発し、またナイロビ方面へと7時間ほどドライブ。窓から見える景色を見ていたらあっという間にホテルに着きました。

9/20

この日はアセンボリ国立公園に行き、ケニアの自然の美しさに感動しました。

9/21

スラム訪問

最終日はナイロビのスラムに行き、チャイルドドクターとしてケニアの小児医療を支援している宮田久也先生の元を訪ねました。

スラムに向かう道中すぐそこにはビルが見えていて綺麗なショッピングセンターがあったのに一本道に入っただけでスラムが急に広がっていて驚きました。

スラムツアーでは家と家の狭い道を通って公衆トイレを案内してもらい、スラムで生活する人々の様子を見させてもらいました。公衆トイレはきちんと掃除がされていましたが、下水の様子は衝撃的でした。汚物や生活排水が流された下水の配管が丸見えになっていて、町中に悪臭が漂っていました。住居のすぐそばの配管も途中壊れていたりして足を踏み外したらはまってしまうぐらいでした。スラムには子供たちがたくさんいてみんな元気に走り回ったりしているのですがこんなに汚染された水が子供達の遊び回るすぐ近くに流れていることがとても危険だなと思いました。日本では蛇口を撚れば綺麗な水道水がいつでも流れてきて、別に今まで普通のことだと思って意識もしてきませんでしたが、綺麗な水を得るということがどれだけありがたいことなのか今回実感しました。今回アサンテナゴヤの支援金の一部で公衆トイレに水のタンクを設置したのですが、スラムでは綺麗な水にアクセスできる機会を作ることが大切だなと思いました。

スラムの一角で子供たちが集まってくれていて、スラムで生活する子供達に教科書やおもちゃの聴診器を渡させてもらいました。スラムにいながらも学校に通って医師になりたい、弁護士になりたいと志を持って夢を語る子供達の姿は希望に満ち溢れていました。そして、みんな医師になりたい理由の一つに家族やこの街に住む人を助けたいという思いがあり、心に訴えかけられました。子供達が大きくなって将来本当にこの地域の医療を支える人が出てきて欲しいなと思いました。

スラムから空港に向かう高速道路で、ケニア１大きいスラムであるキベラスラムが見えました。ちょうどナイロビの中心街のビル群がスラムの奥に見えていて貧富の差を考えさせられる光景でした。煌びやかな生活のすぐそばに貧困で苦しむ人たちが隠されているようなそんな印象を受けました。

さいごに

今回数々の貴重な体験をさせていただき、考えさせられることもそこから学んだことも本当に多かったです。自分が知らなかっただけで、こんなにも放置されたままの問題が溢れているのだということを実感しました。そしてその現状を知らずに生きていくような人にはなってはいけないなと思いました。

今回の経験をこれで終わりにしたくはないなと思い、今後自分も何らかの形で国際医療に関わっていきたいと思うようになりました。そのために何が必要なのか自分の中で考えてこれからも学び続ける姿勢を持ちたいと思います。

このような貴重な機会をくださった内海先生をはじめアサンテナゴヤの皆様に心より感謝しております。

ケニア実習

愛知医科大学医学部５年　澤村　まりな

今回が私にとっては人生初めてのアフリカへの渡航でした。

日本とは 180 度異なるその世界での経験は、日常に戻った今では夢だったかのように感じるときがあります。それほどにケニアで過ごした日々の中で目にした風景は、どれも色あせることがない一生の思い出です。

成田からほぼ丸々24 時間をかけて到着したケニア。

初めに着いたナイロビは、想像していたよりもずっと都会でした。街中には道端でＳＮＳに上げるための動画をとっている若者も多くみられました。

しかし、ホテルの窓を開けると視界いっぱいにサバンナが広がっていて、アフリカに着いたのだと実感したことをよく覚えています。

バスに揺られている時間も多かった今回の旅でしたが、窓の外に広がる景色はどれも真新しくこれまでに見たことのない世界で、外を眺めているだけであっという間に時間は過ぎていきました。

そうしてナイロビから、7 時間かけて向かった先はキシーという町でした。

キシーでは、ケニア国内でも高い医療水準を誇るという病院を見学させていただきました。

とくに印象的だったのは、NICU です。自身が日本で実習をしている NICU とは似ているようで大きく異なるその様子はとても印象深かったです。

新生児に対して光線療法をはじめとする最先端の医療が行われている様子にまず驚きました。首都ナイロビとは離れた地ではあるものの、医療体制がしっかりと整えられていました。

しかし部屋を見渡すと、１つの保育器に平均して 2〜4 人の赤ちゃんが寝ていました。4 人の赤ちゃんが寝ている保育器では、スペースが狭いので赤ちゃんの向きは交互です。

その保育器が並べられている狭い空間を、たくさんのお母さんたちが代わる代わる授乳や世話に訪れ、NICU は人でひしめき合っていました。静かで、ひっそりとした環境のイメージを NICU に持っていた私は、まさに想像の斜め上の環境にギャップを感じました。

ケニアの人口分布図は日本とは対極のピラミッド型だとあとから伺ったのですが、出生の現場からもそのことを痛感することができました。

キシーからは、アサンテの皆さんが長らく携わっていらっしゃるゲム村の診療所にも訪問させていただきました。

ゲム村の診療所は、周囲の民家の数に比べて診療所にはいつも患者さんが溢れていた様子が印象に残っています。マラリア、鎌状赤血球症など、日本の診察室ではなかなか出会うことのない疾患を抱えた患者さんの診察にも立ち合わせていただきました。

衛生環境や自然環境によって、コモンディジーズと呼ばれる疾患が異なることを現場で感じることができました。聞きなれない医療英語も多く診察室では焦ってばかりでしたが、今回の旅では同行させていただいた先生方からたくさんのことを教えていただきました。

そんな貴重な機会を得ることができたのも良い思い出です。

そのうちのお１人である薬剤師さんは、診療所の薬剤部で自分が以前に教えたことが生かされている様子を見て感銘を受けておられました。さらにゲム村の救急車はアサンテを介して寄贈されたものだったりと、その診療所ではこれまでのアサンテの皆さんの軌跡や功績を土地から感じることもできました。

また病棟では産後１日目のお母さんが元気に歩いており、パワフルなケニアのお人柄にはいつも元気をもらえました。

しかしながら、一番の衝撃はやはり旅の最後に立ち寄ったスラム街だったと思います。

匂いも、街の雰囲気も、実際に体感してみてわかることが多くありました。テレビや、ネットでしか見たことのなかった現実を目の当たりにしてみて、自分より小さな子供たちや親子がこの環境で生活していることがにわかには信じられませんでした。

排泄物やゴミで真っ黒な水が流れる水路が道の真ん中にあったり、人 1 人がやっと通れる曲がりくねった道が続いていたり、鳥や犬が自由に道を歩いていたり…

スラム街の家々の隙間からは、遠くに首都ナイロビのビル群が霧の中にかすかに見えました。

1 つの国の中にある大きな格差が一目に映る光景を目にしたときの感情は、言葉に表しがたいものでした。そんな中でも、親のために医師や弁護士になりたいと輝かしい未来を願う子供たちの目は真っ直ぐで、一生懸命に日々を生きている様子に胸が打たれました。

離れた土地にいても、彼らに出会えたことは私の人生の動力になり続けると感じています。

ケニアは、自然や動物と密に関わり合っている国でした。

道を見ていると、家畜として飼われている牛、羊、ヤギはもちろん、野生のシマウマやキリンにも出会うことができました。見渡す限りあたり一面の草原は、日本に帰ってきてからではなかなか見れない光景だったと今更ながら恋しくなってしまいます。

人類が発祥したと言われるアフリカ大陸で、パワフルな人々と動物たち、大自然に囲まれて過ごした日々は間違いなく私の人生にとって忘れられない時間です。

最後に、今回のケニア渡航ができたことを、お世話になった皆様に心より感謝いたします。

ケニアでの実習を振り返って

愛知医科大学医学部 4 年　竹内　詩織

「途上国で医療支援をする。」私が医師を志した理由です。高校生の頃、中村哲医師の活動に感銘を受け、私も貧しい地域の人々の為に活動したいと思うようになりました。そして、今回、多くの方のご厚意によりケニアでの実習に参加させて頂くことができました。

1. シロアムの園

シロアムの園は重症心身障害児のための施設です。ケニアでは福祉が充実しておらず、重症心身障害児は特に支援されにくい存在だそうです。差別や偏見もあり、家に隠されている子もいるという事実に胸が痛みました。この問題に目を向け、現地で活動されている公文和子先生にお会いできました。本や

新聞を読んで、以前から憧れていた医師の１人です。公文先生がいるだけで子供達がとびきりの笑顔になったことが印象的でした。また、家族の経済援助になるよう、母親たちが野菜を栽培し、販売するための畑などもありました。医療だけでなく、同じ不安を抱えている人たちのコミュニティ作りまでされている姿に公文先生は心の底からケニアの人たちのことを思い、人生を捧げているのだと感じました。

2. ゲム村の診療所

大学の講義でゲム村での医療キャンプの紹介があり、訪問を楽しみにしていました。道中は赤褐色のガタガタの土道路、自然いっぱいの土地で本当にこんな所に診療所があるのかと不安に思いました。電気も水道もない、テントの診療所をイメージしていたのですが、いざ到着すると素敵な建物が建っており、驚きました。診療所内は明るい音楽が流れ、多くの人で賑わっていました。いったいどこからこんなにも沢山、人が集まってきたのか不思議です。

診療所では薬剤の処方と診療を見学しました。以前から憧れていた、途上国での診療です。コールドチェーンの青い箱にも手書きのカルテにもワクワクがとまりません。鎌状赤血球症やマラリアの患者さんを実際に見れたことも貴重な経験です。また、今朝出産したばかりのお母さんと赤ちゃんにも会うことができました。本で知った途上国は病院が遠くて道中での出産や大量出血死など出産のリスクで溢れていました。この診療所ができ、病院にアクセスしやすくなったことで、無事誕生した命、失われなかった命があるのだと感慨深く思いました。アサンテナゴヤの皆様が行った診療所を建てるというご活動の素晴らしさを感じた瞬間です。

3. カボンドの HIV/AIDS 関連の学校

HIV 陽性の人達が集まり、青空教室のような学校を開いていると聞いていましたが、実際に行ってみると学校がないというハプニングがありました。以前寄付した物品を巡って内部衝突が起こり、分裂してしまったようです。「日本人が介入したことで友人とバラバラになってしまった子供達もいるのだろうな」という考えが生じ、支援とは何なのだろうかと複雑な気持ちになりました。これまでも支援をするに当たって様々な問題があったそうです。寄付金を持ち逃げしてしまう青年、プレゼントをしたことで周りの人に妬まれ、殺されてしまった人。以前まで物品やお金を寄付することは善い行いだと思っていました。しかし、支援は良い側面だけではないのだと知り、自分がこれまでしたいと思って

いた国際協力が本当に正しいことなのか考えさせられました。

4. スラム

スラムは酷い臭いで思わず息を止めてしまうような所でした。道には大量のゴミが散乱し、汚水が溝を流れています。「こんな環境では病気にもなるよな」と思わず感じました。清潔な水、トイレがあればどれだけの人が病気にならずに済むだろうか。今まで私には見えていなかった問題が顕になりました。実習中、教えて頂いた「病気と経済は関係する」という言葉が頭をよぎります。「必要なのは医療ではなく、国家がインフラを整えることではないか」、「この国で私ができることはたかが知れている、いっそ日本で医師をすることに方向を戻した方が良いのではないか」とも思いました。

しかし、医師になりたいと素敵なスピーチをしてくれた子供達の真っ直ぐな目を見ると、自分には関係のない世界だと言って目を背けることはできません。嬉しそうにスピーチをしてくれた子供達の夢が実現する、そんな日が来たらどれだけ良いでしょうか。

最後に

このような機会を下さった内海先生をはじめアサンテの皆様、宮田先生、本当にありがとうございました。今回の実習では支援とは何なのかと改めて考えることが出来ました。また、支援には医療や物資を提供するだけでなく、公衆衛生や熱帯医学など様々なアプローチがあるのだと知りました。圧倒的な貧富の差や劣悪な環境、支援の難しさを見て心が折れたことも事実です。しかし、診療所に集まる人達や盛大に歓迎してくれるカボンドの女性、夢を語るスラムの子供達などケニアで暮らす人々と接し、アサンテナゴヤの方達が慕われている姿を見て、いつか私も何かしらの形で支援に携わっていけたらと思います。

ケニア渡航に参加して

薬剤師　　垣越　咲穂

私は2019年に初参加をさせていただき、今回は２回目のケニア渡航となりました。初めてのケニア渡航では無料医療キャンプに薬剤師として参加させていただき、多くの学びがありました。このケニア渡航がきっかけで「社会課題」を意識するようになりました。初めての渡航では、見るもの全てに驚き、また新鮮な学びも多かったのですが、一方で次に渡航したらどんな見方ができるだろうかと考えていました。大きなきっかけを与えてくださったケニア渡航ですので、またもう一度行きたいと願っていたところ、今回もご縁をいただき参加させていただくことになりました。皆様に感謝申し上げます。

久しぶりの渡航であったため準備中や空港へ向かうまで、とても緊張していました。しかしあれほど緊張していたにもかかわらず、飛行機に乗ってしまえば、これからどんなことを経験できるだろうかと胸を躍らせていました。多くの場所を訪ねて支援物資をお届けし、施設見学や交流をさせていただき

ました。今回は驚きばかりでなく、新しい視点で様々なことを感じることができ、とても有意義なケニア渡航となりました。

まず訪問したのはシロアムの園です。障害を持つ子供達とご家族の支援という素晴らしい事業をされています。新しい素敵な施設で公文先生がお出迎えしてくださいました。施設の中には教室やリハビリ室、キッチンなどが整っていました。公文先生が今後の事業継続に向けての取り組みをされているのが印象的でした。

次にアサンテナゴヤ診療所を訪問しました。私は診療所の訪問をとても楽しみにしていました。診療所内の薬局や診察室など変わりない部分があり懐かしく思う一方で、病棟の建設が進んでいたり、エリアスさんのご家族が病院でお仕事されていたりと変化がありました。スタッフも増えて診療所は活気に溢れていました。生まれたばかりのお子さんとそのお母さんがベッドにいらっしゃり、診療所で出産されている姿もありました。

診療所を訪れた日程で現地の無料医療キャンプが行われていました。多くの患者さんが集まっており、診察を受けてお薬を受け取っていました。前回アサンテナゴヤで行った無料医療キャンプの方式を踏襲しており、受付から診察までの流れや、カルテや処方箋、薬袋への入れ方や渡し方までそのままでした。支援が繋がっている現場をみて、感慨深いものがありました。薬局でご挨拶したところ私のことを覚えてくださっていて「薬局に入って手伝っていってよ。」と声をかけてくださり、丁寧に薬局内の在庫も見せてくださいました。以前よりも薬剤数が増えており、また在庫の整理や管理もされていました。充実した薬局へ進化している様子を見ることができ大変嬉しく思いました。そして薬局には抗HIV薬が置かれ、お薬のお渡しができるようになっていました。「ここでHIVのお薬が渡せるから患者さんを診ることができるよ。」と嬉しそうに紹介してくださいました。

キシイ病院ではHIV外来を見学させていただきました。様々な抗HIV薬の在庫があり、また抗結核薬も在庫されていました。HIV外来薬局の薬剤師は患者さんに合わせてお薬の払い出しをされており、在庫の管理や処方の確認などをされていました。予約センターでは「予約している患者さんが日程どおりに来てくれないこともある」とおっしゃられており、またカウンセリングルームでは日々の悩みもおっしゃられていました。国は違えど患者さんのサポートがいかに難しく、また重要であるか感じた場面でもありました。

カボンドではコミュニティに洋服や靴などを届けました。子供達が歌を歌って迎え入れてくれ、お母さんたちがお茶やお菓子を振る舞ってくださいました。物資を届けることはできましたが、コミュニ

ティで平等に物資を分けることはとても難しいようです。支援する側にも、どのように何を誰に支援するのかという責任が伴うことを感じました。

チャイルドドクターでは、宮田さん達スタッフがスラム街を案内してくださり、スラム街の子供達に学用品や、衛生的な水を溜めるタンクをプレゼントしてまわりました。子供達が歌を歌って迎えてくれとても嬉しかったです。子供達の中には医師になりたい、これからたくさん学びたいと話してくれる子も多くいました。「感染症で苦しむ人がたくさんいるから、家族やみんなを助けられるよう医師になりたい。」などスピーチもしてくれました。子供達の言葉は力強く、表情は輝いていました。

そのほか今回はアンボセリ国立公園でのサファリにも参加させていただきました。たくさんの動物たち、特にゾウたちを見ることができアフリカの大地を感じました。スーパーマーケットを訪れた際には、品揃えも豊富で衛生的であまり日本と違いを感じませんでした。ナイロビの都会的なホテルにも宿泊させていただきました。しかしキシイやゲム村の地元の人たちは、外で物を売っていたり、機械を使わず農作業をされていたり、遠い距離を歩いて移動したりしていましたし、キシイのホテルではお湯は出るだろうか電気は大丈夫だろうかと心配しながら蚊帳の中のベッドで宿泊するという前回と変わらないケニアの光景もありました。

前回と変わらずケニアを訪れて心を打たれたのは「子供達の笑顔」でした。子供達はキラキラした眼差しで、肌の色も言語も違う私たちを嬉しそうに迎え入れてくれます。将来の夢や希望を語ってくれる子供達もいました。支援の一つとしてやはり教育も欠かせないことであると改めて感じました。

今回の渡航では多くの刺激を受け、また新しい考えも浮かびました。私の中で点として散らばっていたものが線となるように感じる瞬間もありました。このような支援活動に継続して参加させていただくことは初めての経験でした。これまでの支援が実を結び、次の世代へ繋がっています。今回の素晴らしい経験を今後に活かして行きたいと思います。

最後に、このような機会を与えてくださったアサンテナゴヤの皆様、渡航を共にしてくださったメンバーの皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

ケニアに学ぶ

薬剤師　渋谷　伸子

2019 年 9 月の訪問以来、5 年ぶりの渡肯でした。

今回一番嬉しかったことは、多くの友人達に再会できたことです。なぜ一番嬉しいかと言うとコロナ禍では世界中で多くの方が亡くなったので、医療体制が十分ではないケニアのことを心配していたからです。

さて、変化は日々起きているのは当然ですが、5年もあると本当にいろいろなことが大きく変わっていました。ナイロビの街では、空港からの高速道路が開通（ETC使えます！）、街中を走っている車のレベルがアップ（以前はカローラが多かったのが、今回はハイブリッド車も多く見られました）、ナイロビ空港はプレハブのような建物だったのがとても綺麗なビルに変化していました。変化はキシイの街やゲム村にもありました。道路の舗装は伸びていて、ホテルからゲム村まで車で1時間以上かかっていたのが、40分ほどに短縮されました。いつも泊まっているホテルは少しぼろくなりましたが、スタッフは同じで、笑顔のかわいいコックさんに再会できました。

毎年訪れているゲム村は特に大きく変化していました。診療所への道の途中で、“St. Teresa Asante Nagoya Health Centre”と書かれた道案内があり、入り口にはその名前が大きく掲げられていました。アサンテ ナゴヤに対する感謝なのだと思うと感動します。診療所の門前は、以前はマイクロバスがやっと通れる道幅であったのが広くなっていました。中に入ると救急車（日本からの寄付）、乗用車、新しく建築を始めた建物（1階の枠のみで工事中断）があり、驚くことばかりです。診察室の中も見学させていただきましたが、耳垢をとる処置をしているその先では、出産が行われたとのことで、生まれたばかりの赤ちゃん二人にも会うことができました。この場所は村の人達の手で運営する医療の場となったことを実感しました。

工事中断している建物は、５階建ての病棟にする予定とのことで、それを聞いた時、「有言実行」という言葉を思い出しました。夢をかなえるためには言葉に出して、一歩を進めることが大事なのだと改めて教わりました。

私が初めてゲム村に行った時は空き地にテントを張って医療キャンプを行いましたが、その場所に少しずつ建物が増え、井戸が完成し、今ではケニア人の医療関係者が医療を提供しています。2012年の私（初めてのケニア）にはこんな日が来るとは全く想像していませんでした。きっとこの先も想像できないことが続くのだと期待しています。

ゲム村以外にもシロアムの園、公文先生、チャイルド・ドクター、宮田さんを訪問しました。公文先生は変わらない素敵な笑顔で精力的に障害児とその家族を支援されていました。シロアムの園では2016年の医療キャンプに参加された佐藤陽太先生に再会するサプライズがありました。研修で短期間シロアムの園にいるとのことで、ここでも人のつながりの素晴らしさを感じました。チャイルド・ドクターの宮田さんは現在スラムでの支援もされているとのことでスラムの子どもたちへアサンテ ナゴヤから文

房具プレゼントというイベントを設定してくださいました。公文先生も宮田さんも輝いて見えて、私には神様のように見えました。

私は 2012 年より、ケニアの自立を支援するという目標のもと、ケニア訪問に参加させていただきました。支援する立場でしたが、私自身がケニアに励まされ、勉強させていただいたと思います。今後も日々の生活の中でケニアのことを思い出し、ケニアとの繋がりを継続していきたいと考えております。

アサンテ・ナゴヤに感謝するとともに出会えた多くの友人達に感謝しております。

初めて参加して

芝　美樹

私は、今回初めてケニア旅行に参加させていただきました。「私もいつかアサンテナゴヤの医療ボランティアに参加し、看護師として何かお役に立ちたい。」と思ったのは、数年前勤務していた名古屋の聖霊病院内での講演会で内海眞先生のゲム村での活動報告を拝聴した時でした。

日本で普段、診療を行いお忙しいはずの内海眞先生がいつ活動を行なっているのか？お忙しいのに、どこにそのパワーがあるのか？そのパワーはどこから溢れ出てくるのか？と仕事と家庭の両立で全く余裕のない毎日を過ごしていた私には、この活動への参加は夢のまた夢だと半分諦めていました。コロナも落ち着きケニアへ今年は渡航することをお聞きし、「子育ても一段落し仕事の調整もできるようになった今年はチャンスだ。」と思い、内海眞先生にお願いし同行させていただけることになり夢を叶える事ができました。

アサンテナゴヤの今回のケニアへの渡航の目的は、2009 年より行なってきたゲム村の診療所の現在の視察や現地で活躍されている日本人の方々の訪問でした。私としては看護師としてボランティア活動を行うことはできず残念でしたし、今まで多くのボランティア活動に参加されていた方々の活動の集大成の視察に、一度も医療ボランティアを行っていない私が参加させていただくことは本当に申し訳ない気持ちで一杯でした。でも、折角参加させていただくので、私の知らなかった世界を自分の目でみて今後の人生の糧にしたいという思いでケニアに渡りました。

ゲム村の聖アサンテナゴヤの診療所では、長年ボランティアに参加されている方々より診療所が今の形になるまでの歴史や、今は使用されていない井戸や、穴しかなかったトイレが整備されていることなど敷地内を歩きながら教えていただきました。日本の支援を受けるだけでなく、エリアス牧師を中心に現地の方が継続して医療提供を行っている現場を実際に目で見ることができました。これはアサンテナゴヤの活動が、その時だけではなく未来に向けた支援であったことの結果なのだと実感することができました。

ナイロビの障がい児施設「シロアムの園」では公文先生にお話を伺い、きれいに整備されたお庭やカラ

フルに彩られた施設内を見学させていただきました。子どもたちや施設で働く人々の輝く笑顔からまだまだ課題はあるかもしれませんが、公文先生により多くのお母さんと子どもたちが救われていると感じました。

スラム街では、チャイルドドクター理事の宮田さんとスタッフの方に出迎えていただき、スラムの子どもたちから歓迎の歌をプレゼントしていただきました。足元に生活用水が流れる狭い通路を歩きながら、アサンテナゴヤからの支援で準備していただいた手洗い用のタンクの設置をしました。私たち日本人には恵まれていないと感じる環境でも、きらきらと輝く瞳で夢を語る子ども達を見て、命の力強さに感動を覚えました。

今回ケニアへ同行させていただき、内海眞先生をはじめアサンテナゴヤの皆さん、今までボランティアでゲム村に行かれた方々、そして公文先生や宮田さんのケニアの人々への無償の愛を感じることができました。その愛が多くのパワーを生み出し行動に結びついていると思いました。

今回参加させていただき、私にもできる「何か」があるのではないか、またこれからの人生の中でチャンスを見つけ誰かのためにできることを探していきたいと心に刻むことができました。アサンテナゴヤのケニアへの訪問は最後となりましたが、私と同じ想いを持った方々で今後も何らかの形で継続できることを願っています。本当に貴重な経験をさせていただきありがとうございました。

6 年ぶりのケニア渡航
～セント・テレサ・アサンテナゴヤヘルスセンターの発展とともに～

大阪市立総合医療センター感染症内科　白野　倫徳

大阪市立総合医療センター感染症内科の白野倫徳と申します。平素は HIV 感染症の診療や、マラリアなど輸入感染症の診療も行っております。アサンテナゴヤとのご縁は 2015 年からで、2015～2018 年にかけて 4 年連続で、そしてコロナ禍による中断を経て今回、6 年ぶりにケニア渡航の機会をいただきました。

セント・テレサ・アサンテナゴヤヘルスセンターの発展

私自身は、建物がなくテント内で診療していた時期は経験しておりません。初めて参加させていただいた 2015 年は、現在のヘルスセンターのうち初期の建物は完成していたので、その建物の中に机と椅子を設置して診療を行っていました。薬局や検査室、鍼灸の施術室として使用していた建物もすでに稼働しており、ある程度診療の流れは確立されていました。しかしながら当時はまだ電気は通っておらず、住民

の皆さんはカエルやヘビが泳いでいる水たまりのような井戸の水を使用されていました。

それからの4年間は、セント・テレサ・アサンテナゴヤヘルスセンターの発展とともに歩んだ期間でした。ハード面では、電気が使用できるようになり、深井戸が完成し、清潔な水が供給されるようになりました。新しい建物も増築され、病棟や外来診察室、薬局などが整備されました。ソフト面では、ケニア政府より正規の医療機関として承認され、クリニカル・オフィサーや看護師が勤務するようになり、入院診療や分娩を行うことができる総合的なヘルスセンターとなりました。私たちの診療の成果としては、新規にHIV陽性と診断される方の数が次第に減少し、すでに医療にアクセスして服薬を開始している方の割合が増えてきました。

ゲム村の子どもたちと

その過程では行政との交渉などで多大な苦労があったことと推察されます。金銭授受や雇用に関するトラブルもあったとお聞きしております。そうした苦難を乗り越えてセント・テレサ・アサンテナゴヤヘルスセンターを発展させてこられた、エリアス牧師をはじめ住民の皆さま、RUNELDをはじめ現地NGOの皆さま、内海眞先生をはじめアサンテナゴヤメンバーの皆さま、ならびにその活動を支えていただいた皆さま、すべての方々の努力が結実したものであったと実感しています。

私たちが訪問できなかった5年間にも紆余曲折があったと聞いておりますが、人員も増え、ヘルスセンターとして地域においてしっかりと役割を果たしてこられたようです。活気に満ちたヘルスセンターの光景を目の当たりにし、私たちは心打たれました。

もちろん、ヘルスセンターの運営について、課題は山積しています。ケニアの保健医療制度の変化にも翻弄されているようで、アサンテナゴヤの支援がなくなれば、財政基盤も揺らぐかもしれません。それでも、住民の方々はバナナのプランテーションを運営して資金獲得するなど、努力されています。私たちはそれぞれの立場でできることを模索しながらも、住民の方々が主体となって持続可能な、次世代に引き継ぐことのできるヘルスセンターを発展させていくことを見守っていきたいと思います。

今回の渡航では、エリアス牧師やそのご家族、セント・テレサ・アサンテナゴヤヘルスセンターに関わる皆さまに温かく迎えていただきました。カボンドの元幼稚園施設を訪れた際にも、子どもたちやお母さんたちの熱い歓迎を受けました。ケニアの、それも通常なら絶対に日本人が訪れることもないような山あいの村に、日本とケニアの友情の証として「セント・テレサ・アサンテナゴヤヘルスセンター」という名前が刻まれたことは、後世まで語り継がれることでしょう。

ナイロビの経済的発展の光と影

ナイロビのジョモ・ケニヤッタ国際空港に降り立った瞬間、著しい経済的発展を実感しました。高速道路

が空港まで延び、料金所には ETC が設置されていました。幹線道路沿いには新しいショッピングモールや高級ホテルが建設され、欧米のブランド品の看板も目立ちました。新しい高層ビルもどんどん建設中でした。

その一方、私たちは障がいをもつ子どもたちのケア施設「シロアムの園」と、スラム街住民の支援をされている「チャイルドドクター」を訪問させていただきました。

シロアムの園の壁画

障がいをもつ子どもたちに対しては、デイケアやリハビリテーションが必要であり、そのための支援は欠かせませんが、そこに公的資金が投入されることは少ないようです。シロアムの園のような支援活動は非常に重要ですが限界があり、ほとんどの子どもたちが十分なケアを受けることができていない現状を伺いました。

チャイルドドクターの方々と訪れたナイロビのスラム街では、本年 2 月に大規模な火災が発生し、100 軒以上が焼失し、多くの方々が住処を失いました。スラム街で暮らしている人は多くいますが、このような災害においても行政からの十分な支援は受けられないようです。アサンテナゴヤからの寄付が、住処を失った方々の支援に活用されたとお聞きし、胸が熱くなりました。

ナイロビのスラムの子どもたちによる歓迎

発展著しいナイロビ市内とは裏腹に、障がいを持つお子さんやスラム街で暮らす方々など、十分な支援を受けることができない人々がたくさんいるという現状を目の当たりにしました。経済的発展著しいナイロビの都心はケニアの一面であり、スラム街もまたリアルなケニアの景色です。光と影を知ったうえで、これから自分に何ができるのか、自問自答することとなりました。

アサンテナゴヤでの活動経験は、私にとって本当に貴重な財産です。このような機会を与えてくださった皆さまに、厚くお礼申し上げます。

「これからこそつながりたい」

愛知県衛生研究所　水谷　裕子

キャンプ開催が久々だったので、しばらくキャンプに参加していなかった私にとって今回の参加は本当に久々のケニア行きでした。ゲム村まで行く道が整備されてキシイの町中からの所要時間が激減し、クリニックの建屋ができ、クリニックの運営を村のメンバーが担っていて、村の人達の相変わらずの底力にもケニアという国の底力にも驚かされました。キャンプで私は検査を担当させてもらっていたのですが、今回は検査もやらずに何をしたらいいのかと最初は少々思っていたのですが、実際は久々に会えた村の仲間とたくさんお喋りでき、会えなかった人たちの現状も聞くことができ、またここに戻って来たいと思うことしきりでした。

ゲム村だけでなくいくつかの団体の活動を見学させてもらうこともできました。それぞれの場所でそれぞれの方が活躍されていて、そのパワーに圧倒されるばかりです。そんな感動の中で、何かちょっとだけお手伝いできたらいいなとか、日本のこんなところと繋げられないだろうかとか、夢レベルだけどこんなことしてみたいなという思いにも駆られました。

ケニアとの縁をくださったアサンテナゴヤと、いつも仲良く私をお世話してくれるアサンテ・ゲムのメンバーの皆様に感謝申し上げます。願わくば、このご縁を大切にし、ケニアをはじめとするいろいろな場所や人とつながっていけたらと思います。夢レベルのやってみたいこと、また皆さんとお話したいです。

＊会費、賛助会費、協賛及び寄付金をいただいた企業・団体および個人（敬称略）
（2024 年 4 月 1 日から 2024 年 10 月 31 日までにご支援をいただいた皆様です）

宮本信代、森下理香、市野健二、石川佳子、小田賢一、小田キミエ、大岩洋子、山本由紀、杉山恵美子、村井謙治、服部将也、遠藤清美、花木達美、（有）ﾔﾏﾌ土地、藪下彩子、石井圭子、石黒博人、服部万里子、山田君枝，片桐初男、藤田麻里子、眞崎満代、青木孝夫、井上重夫、石丸佳代子、丹羽咲江、光川千鶴子、白野倫徳、内海みどり、川田初美、野々山洋子、杉江修治、玉木奈美枝、黒宮隆男、堀井城一朗、宮田靖志、宮城島拓人、杉本みな子、乾朋子、村上優、土屋二郎、美濃和茂、片岡紀子、野村浩子、平野吉廣、手塚和子、福田英夫、大下博、河津芳子、岡田智子、尼子道子、土屋久仁子、山内礼子、高取幸江、安江佐和子、加藤万理、（株）福住、臼井彰基、水谷裕子、住友正武、住友光子、鵜飼利子、石居尚子、日比野福代、日比野丈夫、日比野公治、日比野祐士、一宮中ライオンズクラブ、森本明子、百合草宮子、谷川正実、村瀬幸子、榊原薫、石田義人、内海眞、西尾栄子、菱田純代、宮下悠子、岸田義昭、森岡悠、菊地正、榊原純夫、AOI 募金

＊長い間のご支援ありがとうございました。

お知らせ　　2025 年 5 月（予定）　　2025 年度総会

2025 年 5 月の総会は、アサンテナゴヤ最後の総会となります。

そこで総会終了後、皆様と想い出を分かち合い、語り合う小宴を企画しております。

時期が参りましたら、ご案内を差し上げますので、是非ご参加くださいませ。

事務局：名古屋市東区葵 1-25-1　ﾆｯｼﾝﾋﾞﾙ 906　TEL/FAX：052-933-1588　HP：asante-nagoya.com